イギリス知性史探究の中間報告
―謝辞に代えて―
An Exploration in the British Intellectual History

飯 田 裕 康
Hiroyasu Iida

この度本誌の貴重な一号をもって、私の退職記念号としたいとのご意向を、編集委員長別府祐弘先生より伺いました。2002年４月に本学にまいりましてより５年、取り立ててなんの貢献も果たせなかった者にたいして、はなはだ光栄な身に余るご配慮を賜り、衷心よりお礼申し上げます。この機会に、学部スタッフの方々から賜ったご厚誼とご指導に改めて感謝申し上げますとともに、経済学部のますますのご発展を祈念申し上げます。折角の機会をお与えいただきましたので、本学にまいりました頃より展開してまいりました研究プロジェクト「マルサスと同時代者たちの社会経済思想」（科学研究費補助金による基盤研究（A）　研究代表者　飯田裕康）の研究成果（飯田、出雲、柳田編『マルサスと同時代人たち』日本経済評論社、2006年11月刊）を踏まえ、その後の筆者による研究の進展に関する中間報告をもって、ご厚意にお応えすることとさせていただきます。

*

この研究プロジェクトは、筆者にとっては、もともと1978年、筆者が選定・購入に係わったリカードウの１通の書簡を契機といたしております[1]。現在、慶應義塾図書館が所蔵いたしておりますレディー・メアリ・シェパード（Lady Mary Shepherd 1777－1847）宛てデイヴィッド・リカードウの［1819年］10月６日付書簡がそれです。古典経済学の成立と発展に係わった人びと、特に、アダム・スミスやマルサスの書簡に関しては、全集ないし著作集にゆきとどいた書簡編があります。リカードウについては、『リカードウ全集』[2]の第６巻から９巻が書簡集にあてられ、それは古典経済学者といわれる人々の書簡集としては、最も完備したものの一つといって過言ではありません。しかしながら、分野を問わず書簡集のつねとして、刊行後新たな書簡の発見の報告は避け難いものです。リカードウについても例外ではなく、前世紀後半にもしばしば発見と刊行とがおこなわれて現在に至っております。それらは、邦訳版『リカードウ全集』第11巻にとりまとめられておりますが、上記書簡は、筆者がこれを『三田学会雑誌』に翻刻発表した以外には、公刊されておりません[3]。この書簡は、いくつかの興味深いエピソードを含んでいるにもかかわらず、それが何年に発信されたのかが不明で、記述内容の検討に大きな障害となっておりました。幸い、1991年ケンブリ

1　David Ricardo（1772－1823）．リカードゥについては、*Oxford Dictionary of National Biography*（以下 *ODNB* と略称。ただしネット版による。）に現代の代表的リカードウ研究者 Peach による簡にして要をえた評伝がある。より詳細なものとして、Weatherall, David, *David Ricardo a biography,* The Hague 1976. がある。

2　*Works and Correspondence of David Ricardo,* in 11 vols. ed. by Piero Sraffa with the collaboration of M. H. Dobb, Cambridge 1951－55（vol. of Index：1973）.

3　拙稿「リカードウの一書簡（慶応義塾図書館所蔵）をめぐって」『三田学会雑誌』85（１）1992年

ッジ大学ダウニング校にフェローとして滞在した機会に、ケンブリッジ大学図書館所蔵の『リカードウ文書(Ricardo Papers)』の調査と、関連文献資料の調査に従事することができました。

この書簡には、幾人かの人物の名前が登場します。全体的には、Lady Mary からの来信への返書の形をとっており、フランスの数学者ラプラス(Piere-Simon Laplace 1749－1827)による春・秋分点歳差の計算に問題があるというリカードウの指摘が明確に述べられていますが、発信された相手のシェパード夫人がこの点についていかなる見解をリカードウに述べたのかは不明です。シェパード夫人発信の書状そのものは『リカードウ文書』中には存在しません。リカードウの文面から察すると彼はこの問題にかんして相当な自信を持っているように感じ取れます。リカードウがなぜ天文学に関心を示していたのかは、これにも適切な資料を得ることは困難な状況にあります。状況証拠として、いわゆる自然誌(natural history)[4]や数学になみなみならぬ関心を持っていたことをあげてよいでしょう。(たとえば、リカードウの死後、弟モージズの評伝<『リカードウ全集』第10巻所収>によってもあきらかです。)いまひとつは、18世紀末から19世紀初頭にかけてイギリス知性史において、天文学が占める特異な地位をあげておいてよいでしょう。それは、一言でいえば、天文学のアマチュア化です。三つ目の要因としては、1809年に刊行された Laplace の著書[5]の英訳(*The system of the world,* 2 vols. trans. by John Pond［1767－1836］, 1809.)がこの傾向を助長したということでしょう。リカードウは、天文学のみならず学問知識の普及・一般化に大きな関心をもち、彼なりの貢献を果たそうとしています。1806年の London Institution の設立、1809年の Geological Society of London の設立・運営にそれぞれ積極的にかかわっています。

リカードウは、イングランド銀行引受けの長期公債の下引き受けをこととする証券業者(Stock-Jobber)で、彼の父親は、18世紀半ばにアムステルダムからロンドンに移住してきました。父親は移住してまもなくユダヤ教を捨てイギリス国教徒に改宗いたしました。しかし、息子のデイヴィッドが国教徒として一生を終えたかというと、大いに疑問があります。この宗教上の信条問題は、リカードウ研究の決して小さくない新しい問題点だといってよいでしょう。これについては、後に改めて言及いたします。

*

リカードウの生きた時代のロンドン証券取引所(London Stock Exchange)は、フランス革命以後の新たな対仏関係の危機の進展と相まって、活況を呈した時代でした。ここに到る取引所の歴史は、まさしく名誉革命(Glorious Revolution)以後のイギリス国家財政と密接に絡んで発展した歴史でした。この期の経済思想は、E. ヘクシャーに倣って一般的に「紙券重商主義(Paper Money Mercantilism)」と呼ばれますが、近年は、ディクソンの提唱した「財政革命(Financial Revolution)」の時代とされることが多くなってきています[6]。財政革命は、名誉革命政府による、主として戦費

---

4 Natural History は、近代イギリスの学問史ないし科学史のなかで特異な位置を占める領域である。イギリスにおける近代科学は、17世紀に飛躍的に発展し、いわゆる「17世紀科学革命」の時代といわれ、その成果の頂点は、いうまでもなく Sir Isaac Newton の『数学原理』であることはいうまでない。しかしこれより約1世紀前に、Sir Francis Bacon が、経験、観察、実験による学問の重要性を強調した。ここに、Natural History の伝統は胚胎したといってよいだろう。経済学もまた、こうした新たな学問的知性の誕生と成長の一側面を形成している。具体的には、「政治算術」の手法を駆使した Sir William Petty の一連の業績をあげることができる。また、自然現象(自然と人間)の観察とその記述として、かの『名士小伝』(*Brief Lives*, 1669－1696)の著者として知られる John Aubrey(1626－1697)の *The natural history of Wiltshire*, 1685がある。

5 *Exposition du système du monde*, Paris, 1797.

調達にかかわる長期公債の発行と、それを支援する金融システム、それらに伴う「バブル」的活況とその崩壊の危機とが一体となった体制であり、およそ従来の経済史の常識となっていた産業革命の成長一方の時代とは相容れない時代像が提示されるにいたっています。

この財政革命の展開において重要な役割を果たしたものに紙券信用(paper credit or paper money)があります。17－8世紀は、まさに「信用」によって支えられたといって過言ではありません。近代的銀行システムの端緒とされるイングランド銀行の設立は、まさしくこうした信用をめぐる考え方の転換の上になされています。信用は、上は国家信用すなわち公債そのものが表象する信用から、それを根拠としたイングランド銀行による紙券通貨の発行・流通にはじまり金匠銀行家の Goldsmith Note に及び、下はこの時期の一般庶民の「貨幣」需要への対応措置、たとえば「質屋」等々にまで及びます[7]。近代的火災保険業の歩みもこうした信用観の一般化と相まって展開したとさえいえます[8]。ここでは、これ以上に信用思想の展開を跡付けることはできませんが、小稿のテーマとの関係であえていえば、リカードウは、信用の役割を十分理解したにもかかわらず、貨幣政策的には金の役割を重視するに到ります。この認識は、実にリカードウの実務家としての経験に発する、ある意味ではせっぱ詰まった提案としてあきらかにされますし、経済学者リカードウの一生は、つねにこの問題とともにあったといってよいほどの大問題であったといえます。

財政革命時代の証券業とはいかなるもので、そのなかにあってリカードウはいかなる位置を占めていたのか。これについて考えるとき、18世紀後半に刊行され、19世紀中葉に到るまでイギリスにおける証券取引の手引き書とされた Thomas Mortimer, ***Everyman his own broker, a guide to Exchange Alley,*** London 1761の存在を無視できません。著者モーティマは、財政革命下の証券取引を Stock–Jobbing という言葉で表しています。この言葉があえて強調されたのは、この時期の証券取引が、「投機」的取引であることを示し、証券業者と顧客に警鐘を鳴らそうとしたからです。当時の Stock–Jobbing は、極めてリスクの高い投機的取引仕法そのものであって、著者自身これによって多大の損害を被ったこともあったようです[9]。初版以後、本書は着々と版を重ね、仮にリカードウが本書を読んだとすれば第10版から13版の間ということになるようです。

この書物に論じられた投機的証券取引への批判については、実はリカードウもまたそうした見地を共有していたともいえます。これを実証する史料は残念ながら『リカードウ全集』や『リカードウ文書』のなかには存在しません。ただ、証券市場の自己崩壊の危険をはらむ動きを念頭に、リカードウは19世紀初頭にロンドン証券取引所の機構改革に積極的にかかわり、それを導いたことは確かなようです[10]。

財政革命は、18世紀が進むとともに公債市場の流動性の維持という困難な問題に直面します。長

---

6 P.G.M. Dickson, ***The financial revolution in England***, Macmillan, 1962.

7 こうした状況は、1694年のイングランド銀行の設立に先立つ半世紀も前から、“Bank of Credit”なる表題のパンフレットが多数刊行されていることからも推測できる。この点、伊藤誠一郎氏の教示による。

8 これについては、本学経済学研究科に修士論文として提出された永井治郎「イギリス名誉革命期の保険思想」(『経済学年誌』第15号、2007年)が保険信用なる概念を提起して、17世紀末の信用システムと保険業との関連を、思想史的に分析している。画期的試みである。

9 Thomas Mortimer (1730－1810) in：***ODNB***.

10 拙稿「知性史のなかのリカードウ」(飯田・柳田・出雲編『マルサスの同時代人たち』日本経済評論社2006年刊、所収)を参照されたい。

期公債の流動化は、リカードウのような公債請負業者の力能に大きく依存することになり、彼等も請負によるリスクを取引利幅の投機的拡大によって補填しなければならなかったのです。リカードウが後にイングランド銀行を強く批判するような論調で独自な経済分析をするようになるのも[11]、そして、これこそがリカードウ経済学の現実的基盤の一つとなるわけですが、かかる証券業者の状況を改善したいという意図によるところ大であったといってよいでしょう。リカードウ自身は、財政革命によって煽られる投機的証券投資、いわば「紙券重商主義」的ファイナンスのシステムから多大な利益を引きだしながら、古典経済学者としては、それに真っ向から対立する論理を駆使して経済学(Political Economy)の新たな地平を切り拓いたことになります。

*

このようにリカードウがビジネスの世界で直面した事態は、いうまでもなく1789年のフランス革命に由来するイギリスの政治・経済・文化という広範な問題点の一つを示していたに過ぎません。イギリスは、名誉革命以来の最大の国制 constitution の危機に直面していたわけです。

従来、経済学史や経済思想史では、アダム・スミスによって拓かれた古典経済学は、リカードウとマルサスによってそれぞれ異なった、対照的な枠組みのもとに継承されたと考えられてきております。学説や思想の継承関係という観点からは、こうした方法は一定の有効性を有しています。他方で、ここには、歴史的な分析をなそうとする人々の学問的関心や現実の経済実態にかんする問題意識が強く作用することとなり、目的意識的な分析となることも避けがたいことです。近年の当該分野の研究では、こうした目的論的接近から可能な限り自由になり、対象とする学説や思想にかかわる言説を多様な「文脈(コンテキスト)」のなかにおいてみようとする方法が次第に優位に立とうとしています。マルサスとリカードウについてみても、確かに理論体系としては対照的で、その方法も一方の帰納主義と他方の演繹主義といわれるようにこれまた対照的です[12]。しかしながら、こうした理解の仕方には、大きな陥穽があるように思われます。『リカードウ全集』によって見る限り、両者が書簡のやりとりを始めるのは、1811年以降です。リカードウ＝マルサス往復書簡が、両者の経済学説の展開に多大な影響を相互に与えあったことを否定する経済学史研究者はいないでしょう。リカードウが生産の理論を中心に理論体系を組み立てたのにたいし、マルサスは流通や消費の観点を重視する体系を構想したという、これが従来からの通説です。リカードウが証券業者として直面した事態は、マルサスにおいても共通する要因であったとすると、これと経済学説上の対照性とは如何に結びついているのでしょうか。これこそ、18世紀末から19世紀初頭にかけての思想史理解に不可欠な論点をなすものと考えなければなりません。

こうした論点を解きほぐすために、思想史理解に新たな視座が求められていると考えなければなりません。この視座は、対象となる諸言説を時間の経過のなかでとらえる、いわば、言説の出所と行きつく先を時系列的に追いかける従来の方法から脱却して、ある時代の言説のネットワーク的広がりをまず認め、そのネットワークそのものを創り上げる諸言説の交流・対話あるいは「会話」を丹念に追いかけることに帰着します。それは近代の学問諸分野を超えた、相互越境的な知的世界を

---

[11] そもそもリカードウのイングランド銀行批判は、彼の最初の論文「金の価格」(D. Ricardo, The price of gold, in : *Morning Chronicle* on 29. Aug. 1810に刊行。)にすでに明確に示されている。

[12] この論点は、多岐にわたるが、そのうちの一つの方向性については、拙稿「経済学の危機と再生—学問史のなかからふり返る」(慶應義塾大学経済学部編『市民的共生の経済学Ⅳ　経済学の危機と再生』弘文堂2003年刊、所収)で論じている。

構成することに通じます。ここでは、知の分業よりも知の協働のシステムが重視されることになります。こうした言説のネットワークをその時代の知性(intellect)と考えてよいでしょう。

*

では、リカードウはいかなる知の協働のシステムのなかにいたのか、なぜ、彼はそうした世界に参加することになったのか。最後にこの点について大略的に述べてみることにします。

一つは、前に触れましたリカードウの宗教的な信条の問題があります。

ユダヤ人の金融業者としてロンドンにやってきたリカードウの父 Abraham Ricardo は、早々に国教徒に改宗いたしました。では、リカードウ自身はどうであったか。興味深いことに11歳で叔父のいるアムステルダムに修行に出されたリカードウは、ユダヤ教教義の神髄である「タルムード」を懸命に学んだと伝えられていることです。おそらくタルムード学習のつねとして、ヘブライ語でこれを読んだにちがいありません。表向き国教徒であるリカードウは、ユダヤ教から完全に離脱しなかったということになるかもしれません。リカードウは、1812年にグロスタシャのミンチンハンプトという小邑に近いギャトコムパーク(Gatcomb Park)に所領を求めます。リカードウは、"David Ricardo, Esq." と公称する資格を得たわけです。いわば Gentleman の仲間入りを果たしたわけです。娘たちもつぎつぎと結婚してゆきます[13]。こうしたリカードウの家庭環境の変化は、リカードウをしてユダヤ人の家系であることを極力伏せる行動さえとらせます。こうしたことの心理的背景を探ると、リカードウのなかにユダヤ教を捨てきれない心情が脈打っていたといえなくもありません。

1794年、リカードウはプリシラ・ウィルキンソン Priscilla Wilkinson と結婚します。Wilkinson 家は非国教徒(Dissenter)で、ユニタリアンでした。結婚を機にリカードウもユニタリアン派の教会に通うようになります。リカードウは表面上ユニタリアンとして一生を送ります[14]。

先に述べたイギリス国制上の危機の時代に、危機の構成要素の多くの部分は政治的危機ではありましたが、そこにはイギリス国教会(Church of England)による宗教的信条にたいする一元的支配の危機も孕まれていたといってよいでしょう。とくにフランス革命以来フランスからの難民の流入は、イヤでも「異教徒」を当時のイギリス社会、とりわけロンドンが受け入れねばならなくなります。無論、これには歴史的に先例が積み重ねられているわけで、いわゆる「ユグノー」の大量流入それにともなう地域的棲み分けなどが実施されています。今日のロンドンの繁華街 Soho は、マルクスも当初居を定めたところですが、もともとこうした難民のために割り当てられた地域でした。このような体制危機のなかから、世紀転換期以降胎動する Reform Movement のなかで、ベンサムなどもかかわった司法改革とりわけ刑法の改革、また、ウィルバフォース、ホワイトブレッドなどとともに進めた奴隷貿易禁止運動に指導的役割を果たしたロミリ Sir Samuel Romilly (1757－1818)も[15]、もとはフランス人で、アンリ 4 世の「ナント勅令」(1598年)に抗して宗教的難民として17世紀初頭に Soho に住みついたユグノー家系の出身でした[16]。

---

13 リカードウは、とりわけ長女 Henrietta を可愛がった。ヘンリエッタが社交界にでることが、Lady Mary Shepherd を知る機会となったと推測しうるものが、Maria Edgeworth の書簡中に見える。

14 おそらく最新の情報としては、Arnold Heertje, An unpublished letter by David Ricardo, in : *History of Political Economy*, Vol. 39, No. 3, 2007, p. 549.

15 ロミリは、ベンサムの功利主義には与していない。このことは、この時代の改革運動は、多様な流れを持っていたことを示している。これについては、Romilly, Sir Samuel, *Memoirs of the life of Sir Samuel Romilly,* vol. 1, John Murray, 1840. を参照。

ロミリとリカードウは全く履歴を異にしてはいるものの、この時代の知性の一面を共有しています。それは、アメリカ独立戦争やフランス革命がもたらした知識人たちの進取的な危機意識といってよいものです。守るよりは変革を志向する。マルサスにもこのことは共通しているように思われます。彼の『人口論』は、1798年に刊行され、古典経済学のアダム・スミス以後の展開に決定的な影響を与え、古典経済学固有のパラダイム形成に寄与したことは周知のことといってよいでしょう。また、『人口論』は、それまでの救貧に関する議論の方向を大きく変え、貧困を明確に社会問題として示し、その解決の道筋まであきらかにしました。初版人口論では未だ副次的議論に終わっていた産業構造の均衡のとれた発展について、1801年の第2版以降の諸版では多くの頁を割いています。

*

先に掲げた拙稿(2006年)においては、リカードウをめぐる知的状況のなかでKing of Clubsの存在を無視しえないことを指摘しています。1796年に結成されたこのクラブは、まさしくイギリス国制の危機の時代を映す特異な組織です。このクラブの会員は、ほぼ月一度最初は、「フリーメイソンズ・タバーン」で、後には別のレストランで会食するために集まるのですが、このクラブのRegister Bookに依る限り[17]、会員になるためには現会員1名の推薦と、更に1名の会員のセコンドを必要とするもので、会員は会費と食事代を参加の都度納めることになっていたようです。これまでにあげたロミリ、マルサス、リカードウは皆このクラブの会員です。因みに、ロミリは1804年現在ですでに会員であり、マルサスはロミリの推薦とジョン・ウィショーのセコンドで1812年に、リカードウについては、推薦者等は記載されていませんが、1817年6月7日に入会が認められています。

ここにあげたジョン・ウィショー(John Whishaw)はKing of Clubsの創設に積極的にかかわった人物で，ホイッグの重鎮のひとりであったホランド卿Lord Holland(Henry Richard Fox 1773－1840)の篤い信任を得、Holland Houseをして政治的会話の理想の場とした人物です。しかし、残念ながら彼の事蹟については断片的にしか伝わっておらず、*ODNB* にも評伝はありません。しばしば繰り返しております、イギリス国制の危機的状況のなかで、それにたいする政治的対応の一方の陣営であったホイッグ(Whig)のまとめ役として貴重な存在であったと思われます。最初に述べた慶應義塾図書館所蔵の書簡中にも、彼がギャトコム・パークのリカードウ邸を訪れていたことが記されていますし、その他リカードウ書簡集にしばしば登場します。また、リカードウは1819年にアイルランドのポータリントンという代々ある一族の支配する選挙区から下院議員に選出されますが、リカードウをMPとして押し出すうえでも、小さからぬ役割を果たしています。リカードウはこのウィショーやマルサスを通じて、King of Clubsの会員となったと考えられます。したがって、リカードウもまた、当時の政治勢力地図のなかでは、ホイッグの一員とみなされたことは明らかです。大まかにいえば、リカードウもマルサスも、同じ政治的空気を呼吸していたということに

---

16 ベンサムが強く既成の体制迎合的宗教を批判したことは、よく知られている。ロミリは、ベンサムから影響を受けつつも、彼の掲げる功利主義それ自体が宗教的臭いを発していることに警戒的であった。これについては、J. E. Crimmins, Bentham on religion : Atheism and the secular Society, in : *Journal of the History of Ideas*, Vol. 47, No. 1. 1986やJ. E. Crimmins (ed.), *Religion, secularization and political thought Thomas Hobbes to J. S. Mill*, Routledge 1990. とくにIntroduction (Crimmins)等を参照。

17 British Library所蔵(AD37337)。

もなります。

*

Milgate, M. and S. Stimson, ***Ricardian politics***, Princeton (1991). は、リカードウ研究に新生面を拓く画期的成果といってよいでしょう。しかし、この研究にしても、分析の中心は、リカードウの議会活動におかれ、リカードウの議会改革への熱意がいかなる状況に規定されたものであるのかについて、立ち入った分析を欠いています。しかし、リカードウが、彼なりの Reform の課題を『経済学および課税の原理』に到る経済学（Political Economy）に関する仕事のなかからつかみ取るに到ったことは、紛れもない事実といってよいのですが、なお、不十分なものを感じざるをえません。一介の証券業者が、かの壮大な『経済学および課税の原理』の体系を構築しえたのに、なにが関与していたのかと問うよりも、リカードウがいかなる知的世界に生き、時代が求める政治的知性の濃密なネットワークの担い手として自らも成長することによって、まさしく彼の Political Economy はうみだされたと考えるべきではないか。『経済学および課税の原理』はまさしくこうした越境的知性に支えられつつ世に出たと考える次第です。（了）

飯田裕康教授・略歴および著作目録

【略歴】

1937年　東京都に生まれる
1959年３月　慶應義塾大学経済学部卒業
1961年４月　慶應義塾大学経済学部副手
1962年４月　同助手
1967年４月　同助教授
1971－73年　ドイツ連邦共和国チュービンゲン大学にて在外研究に従事
1971年　経済学博士(慶應義塾大学)
1974年４月　慶應義塾大学経済学部教授
1982年９月　ソ連科学アカデミー東洋学研究所客員研究員
1991年10月　ケンブリッジ大学ダウニング校フェロー
1993－99年　慶應義塾大学経済学部長
2000年４月　慶應義塾図書館長
2002年３月　慶應義塾大学を定年により退職　慶應義塾大学名誉教授
　　同４月　帝京大学経済学部教授
2004年４月　ロンドン大学ハロウェー校(歴史学部)名誉研究員
2007年３月　帝京大学を定年により退職

【業績】(2002年以降のみ)

〈著・編著書〉

『ここで跳べ』(高草木光一と共編)慶應義塾大学出版会、2003年。
『現代金融と信用理論』信用理論研究学会編(編集代表者)、大月書店2006年
『マルサスの同時代者たち』日本経済評論社、2006年(共編著)
『生きる術としての哲学　小田実最後の講義』岩波書店、2007年(共編)

〈論文〉

「家族論と経済学」慶應義塾大学経済学部編『市民的共生の経済学　Ⅲ』弘文堂、2002年。
「経済学の危機と再生　―学問史のなかからふり返る―」慶應義塾大学経済学部編『市民的共生の経済学　Ⅳ』弘文堂、2003年。
「経済学史・経済思想史のなかの金融」川波洋一他編『現代金融論』有斐閣、2005年。
「「三田学会雑誌」におけるマルクス」『三田学会雑誌』100巻１号2007年。

〈学会報告〉

「知性史のなかのリカードウ」「リカードウ研究会」（経済学史学会）2004年 7 月 3 日，於明治大学

「信用概念の歴史的位相」（経済学史学会2006年度大会）2006年 5 月24日於神奈川大学

〈講演〉

「大学図書館の社会的使命」2004年 6 月27日、於長崎県立大学

以上